令 和 6 年 度 自 己 評 価 書

学校名：橋本市立隅田小学校

1　今年度の教育目標

『やさしく　かしこく　たくましく』
～夢や目標をもち　未来を拓く　児童の育成～

2　今年度の重点目標

○豊かな心の育成（道徳教育の推進、特別活動・特別活動の充実、市民性の育成、人権教育の推進）
○確かな学力の育成（基礎基本の徹底、学ぶ力の育成、学びに向かう態度の育成、学習習慣の確立）
○健康・安全教育の充実（基本的な生活習慣の確立、健康・体力の向上、安全教育の推進）
○保護者・地域との連携（保護者・地域との連携強化、学校運営協議会及び共育コミュニティとの連携、こども園・中学校との連携、学校ボランティアとの連携）

3　評価項目の取組及び達成状況

A：達成できた　B：概ね達成できた　C：取り組んでいるが、成果が十分でない　D：取組が不十分である

評価項目	具体的方策	取組の達成状況	総合評価
豊かな心の育成	□特別の教科「道徳」の充実 □体験活動の計画的な実施 □学級活動の充実	■本校の目標である「心豊かなすみだっ子をめざす道徳教育」では、道徳教育をもとに、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度の育成を目指してきた。その要となる道徳の授業については、８６％の担任が計画的に実施できた回答しているが、本来は１００％の回答となる必要がある。また、授業の質の高さも課題が感じられる。 ■本校では、道徳教育推進教師を中心に、校内の研修会を自主的に実施している。この取組は、本校の強みとして今後も継続させたいと考えている。 ■生活科や総合的な学習の時間を活用し、計画的に体験活動を実施してきた。３年生のゴマ栽培の中では、ごま豆腐作り体験、５年生の防災学習での防災食体験や起震車体験は、その一例である。その他にも、真土万葉保存会の方々にお世話になり、芋ほり体験（１年・４年）なども行っている。この学習は、異学年の交流学習にもつながり、互いを知る良いきっかけとなっている。本校は、県や市の出張講座にも積極的に応募・参加し、その機会を確保している。いのちの学習、福祉体験学習などを含め、これらの様々な体験が子どもたちの心を豊かにし、健やかな成長につながるものと考えている。しかし、体験すること自体を目的とせず、事前・事後の学習を大切にしながら、今後も体験活動を充実させていきたい。 ■ＰＴＡ主催の体験活動「サマーチャレンジ」は、夏季休業を利用して２日間開催した。今年は、新たに調理も計画し、児童・保護者には好評であった。開催時期、運営方法は改善する余地はあるものの、来年度以降も計画していきたいと考えている。 ■学級は集団生活の基盤であると同時に、児童の居場所でもある。市民性を育てる大きな役割も果たしている。各学級では、学級目標を掲げ、その達成のため日々取組を進めてきた。教職員アンケートでは、「係や当番、委員会、児童会活動などをとおして、学級や学校の一員であることを意識させられましたか。」という問いに８９％、「学級活動などをとおして、互いの人権を尊重する学級集団づくりに努めましたか。」という問いには９４％の担任が肯定的な回答をしている。また、「学級のルールづくり等、児童の主体的な活動の充実を図りましたか。」という問いには８７％、「児童一人ひとりの変化に気を配り、言葉がけに努めましたか。」という問いには、１００％の教員が肯定的な回答をして	B

		いる。これらの結果から、概ね目標は達成できていると判断できるが、児童アンケートにおいて「学校が楽しくない。」と回答した児童が数パーセントいる実態を踏まえると、今後も学級づくりに力を入れていく必要性を感じている。	
	□児童会活動 及び 縦割り活動の活性化	■各委員会では、学校全体の課題に向き合い、その解決方法を児童が主体的に考え、実践したり啓蒙したりしている。それらを統括する代表委員会も意見が活発に交わされ、解決するための方法を児童自らが考え行動しようとする雰囲気が醸成されている。チャイム着席を促す集会での表彰式、トイレのスリッパを整える掲示物、給食前の待ち方を啓蒙する放送などが一例である。挨拶運動や募金活動を積極的に実施している。自分たちの学校をよくしようとするこれら児童主体の営みは、今後も継続していきたい。 ■１～６年生の縦割り班を作り、異学年交流が活発なるよう、全校スポーツテスト、なわとび大会など数多く実施することができた。学年を超えて仲のよい姿が見られるのは、これらの成果の一つである。この姿は、隅田小学校の伝統として引き継いでほしいと願っている。	
	□仲間づくり活動の 充実	■９７％の児童が「友だちとなかよくしている」と回答している。各学級では、休み時間を活用した「みんな遊び」を計画したり、お楽しみ会を実施したりして仲間づくりを行ってきた。しかし、疎外感を感じている児童がいたり、休み時間になると保健室を訪れる児童がいたりすることも事実である。自分本位の言動が見られる子もいる。一人ひとりが認め合い、互いに尊重し合える仲間づくりを意識し、今後も取組を継続したい。 ■「いじめはぜったいに許さない」という強い意志をもち、常日頃よりアンテナを高くして、いじめの早期発見を目指している。また、「いじめアンケート」（なかよしアンケート）を年３回実施し、児童の声にも真摯に耳を傾けている。児童の回答については担任が確認し、事実確認や指導を行う。聞き取った内容や指導したことはデータ化し、最大 3 ヶ月間の経過観察を実施している。しかし、いじめ認知数が横ばいである現状を踏まえると、どの子も受け入れられる温かい学級づくりの大切さを再認識する必要がある。	
	□人権教育の 計画的な実施	■教育計画は計画して終わりではなく、１年間意識を高く持ち、常に確認しながら実践を行うよう教職員に説いている。児童玄関に掲示している「やさしさの木」プロジェクトは今年度も継続し、本当の「やさしさ」が学級の中で溢れるよう各担任が意識的に取り組んでいる。各学級で生まれたやさしさは全校で共有し合い、学校全体の人権感覚が高くなるよう今後も継続していきたい。	
確かな学力の育成	□朝の学習の時間の活用・改善	■朝の学習の時間は、全校一斉で、月曜日：「読書の日」、火曜日：「計算力を高める日」、木曜日：「文法力（国語科）を高める日」と設定している。特に、算数科は新たに算数検定を実施し、児童の意欲向上と定着を目指した取組を新たに進めている。また、５・６年生は、読売新聞の学習教材「よむＹＯＭＵワークシート」を活用し、読む力や互いの考えを共有している。今後は、学年それぞれに抱える課題を分析・把握し、基礎的な力を定着させられるよう、PDCA サイクルを意識した取組を進めたい。	B
	□補充学習の実施	■本校では、１６時の下校時間までを活用し、特に気になる児童に対する補充学習を行っている。また、夏季休業中にも学習教室を同様に実施している。しかし、児童アンケートで「学習がわかりづらい」と回答した児童が低学年で１１％、高学年で６％存在した。これは、家庭学習の不十分さとも大きく関係している。特に、基礎学力の定着や反復学習が必要な低学年は、保護者の協力が必要不可欠である。現在本校では、金曜日の６限目を活用した低学年の放課後学習教室を実施している。今後は、わかる授業はもちろん、個に応じた宿題の出し方や、家庭学習の在り方について研究する必要性を感じている。	
	□研究組織の活性化・ 授業改善	■「考えることを楽しむ子の育成」を研究主題とし、「生活向上部・学力向上部・分析部」の３つの部会からなる研究組織をもとに研究を進めている。各研究部は、横のつながりを大切にしなが	

		ら、主体的に活動を行い、組織の活性化が図れている。また、OJTの効果もあり、主任に代わり部会をけん引できる教員も増えている。本校が大切にしていることは、すべての教員が同じベクトルを向いてチームとして研究を深めることである。指導案の検討会も熱を帯びるようになってきている。今後も、外部の指導を得ながら、授業力向上に向け研鑽に励みたい。	
	□授業研究の充実	■今年度も和歌山大学教職大学院　藤本先生にご指導を仰いでいる。研究授業の指導講評だけでなく、若手教員の公開授業にもご指導いただき、授業力を高めるための取組を行っている。研究協議も年々充実し、焦点を絞った討議を行えている。また、今年度は上記に加え、和歌山大学付属小学校にも協力を仰ぎ、国語科についての模擬授業や研修会を行った。今年度の和歌山県学習到達度調査（４・５年生）においては、国語科は平均と同程度、算数科は平均を上回っている。これら各種学力テストの分析も丁寧に行い、教職員で共有しながら学習を進め、今後もこの研究体制を継続していきたい。 ■「考えを自分の言葉で発表できる」と回答した児童の割合が低学年で７３％。高学年で６７％となった。発言しにくい子どもたちには、班で意見交換したり、隣の子と話す機会を増やしたりしているが、自信をもって話せない子が３割程度存在する。自分の考えをアウトプットすることは、主体的な学習にもつながるため、意図的に表現の場を設定し、その力をつけていきたいと考えている。	
	□ICT の活用	■一人１台のパソコンは、低学年を含め多くの児童が扱えるようになっている。高学年では、オクリンクを使って、自分の考えを先生に送り、全体共有することもできる。しかし、その意見を効果的に授業にどう生かしていくか、電子黒板にどう提示していくかが、現在抱えている教員の悩みである。調べ活動で活用したり、繰り返しのドリルパークをしたりするだけでなく、個別最適な学習を進めるための方法を日々模索しているところである。教職員アンケートでは、４割の教員が、ICT の活用について課題を感じている。また、低学年ほど利用しづらい。教科による差異もある。そのため、パソコンを活用した効果的な授業（経験）を積み上るとともに、ICT 支援員を有効に活用し、具体的な活用方法を更に構築していきたいと考えている。	
	□学習規律の確立	■すべての教員が学習規律を意識して授業に臨もうとしているものの、実際には、学習に集中して取り組めない子、注意されてもつい私語をしてしまう児童が見受けられる。その結果、教員アンケートでは、「学習規律を大切にして、学ぶ雰囲気を醸成できましたか。」という問いの達成率は８７％に留まった。学級規律は、学級経営が大きく関係している。若手教員が増える中、悩みながら学級経営を行う姿も見受けられる。授業力と学級経営力の両輪が上手くかみ合うよう、引き続き助言を行っていきたい。	
	□家庭学習の充実	■保護者アンケートでは、２１％の保護者が、学習内容の定着に不安を待たれており、３５％が学習習慣の定着がきちんとできていないと回答している。家庭学習については、８７％の児童ができていると回答していることとから、保護者の結果と大きな差異が見られるが、これは、学童保育に通う児童の割合が高い（自宅で学習をしない）ことも影響している可能性がある。また、共働き家庭や片親家庭が増加し、子供と向き合う時間が減少していることも否めない。今後も、効果的な量と質を吟味するとともに、家庭に協力を求め、連携を強めて定着を図ることが必要であると考えている。	
	□読書活動の推進	■第２図書室を開設して２年目に突入した。第２図書館は、特に雨の日に人気があり、児童の要望に応じて休み時間に開放している。第２図書館は、県立図書館や市の図書館の本も入れ替えを行ったり模様替えを行ったりするなど、児童が読書したいと思える環境を整えてきた。本年度の読書数は、「ぶっくん通帳」を活用した学級の取組や図書委員会の活動も相まって、倍増した昨年とほぼ同等数を確保している。その結果、本校の取組は県教育委員	

		会より文部科学省に推薦されることになった。保護者を巻き込んだ家読も進めており、本が大好きな児童の育成を目指し、今後も取組を進めていきたい。 注）「ぶっくん通帳」⇒児童が読み切った本を記入	
健康・安全教育の充実	□生活リズムチェックを活用した生活改善 □各種校内大会の実施 □チャレンジランキングの活用 □計画的な安全教育及び 避難訓練等の実施	■本校では、年間３回、生活アンケートを実施している。学年に応じた目安（目標）を定め、各自がそれに向けた生活改善に取り組んでいる。その結果は、生活向上部で分析し、特に課題と思われる部分について、もう一度学級に返して話し合う活動を取り入れている。しかし、テレビ・ゲームの時間や睡眠時間については、依然として課題が見られる。生活リズムの改善は、保護者の協力も必要不可欠であるため、これらの結果を保護者にフォードバックし、家庭での協力も仰いでいる。 　また、本年度は、学校保健安全員会も開催し、学校医の先生方と、本校の実態をもとに意見交換を行った。今後は、保護者だけでなく、校医先生方ともさらに連携を深めながら、様々な課題に向き合っていきたいと考えている。 ■今年度予定していた校内大会（水泳大会・マラソン大会・なわとび大会）については、すべて実施できている。マラソン大会では、今年度も保健体育部（PTA）の皆様の協力を得て、子どもたちに豚汁の提供を行った。また、児童との伴走や見守りも募集し、ＰＴＡを巻き込んだ校内大会を実施することができている。各種校内大会は、本番だけでなく、目標達成に向けた練習の過程と振り返りが重要であり、キャリア教育とも密接に関連する。また、児童の体力の向上にも大きく寄与していることから、来年度も引き続き実施していきたいと考えている。 ■教職員アンケートでは、チャレンジランキング（学びの丘）の活用は３０％、スポーツテストの結果を活用した授業については５０％となり、昨年より達成率が下がっている。しかし、「適切な運動量を確保できるよう、体育の授業を工夫しましたか。」という問いでは、１００％の教員が概ね達成できており、意識的な取組が見られる。新体力テストにおいて本校は、長座体前屈（柔軟さ）、20mシャトルラン（持久力）に特に課題が見られた。また、高学年になるほど、多くの種目で平均点を下回る結果となっている。体育の授業においては、十分な運動量を確保するとともに、スポーツテストの結果を踏まえた運動を取り入れていく必要がある。このことを体育主任と共有し、来年度の教育計画の立案に向け、取り組んでいきたい。 ■当初計画していた学校安全計画は、概ね計画どおり実施することができた。本年度、本校はサイン＆サンクス運動（橋本警察から依頼）に参加しており、その実践を全校で行うとともに、警察・JR と連携した踏切事故を防ぐための集会を行ったり、地域の人々に交通安全を呼びかける DJ ポリスにも児童会が参加したりした。例年実施している１年生の歩行指導、計画的な安全点検、引き渡し訓練などは、繰り返し行うことでその意識が高まるため、引き続き来年度も計画していきたいと考えている。 ■避難訓練は、計画どおり「火災」「地震」「不審者」に対応する訓練を実施した。特に、地震を想定した訓練では、シェイクアウト訓練だけでなく、休み時間に発生した状況を想定した実践的な訓練を実施した。また、不審者対応訓練では、橋本警察署・青少年センターの協力を得て、実際に犯人が校舎内に侵入し、警察官により確保されるまでの実践的な訓練を行った。この訓練により、本校の死角や教職員の対応方法について改めて見直しが必要な部分も見つかっている。来年度も実践的な訓練を実施し、臨機応変に対応できる職員体制を構築していきたいと考えている。	B
保護者・地域との連携	□保護者・地域への情報発信 及び 教育相談体制の充実	■教育目標や取組の伝達については、８８％の保護者から評価いただいている。学校ホームページの更新や学校便り「すみだっ子」・学年便りの配布に加え、多くの学級が学級便りを配布している。また、地域版学校便りも継続して発刊し、意識的な情報発信を行ってきた。しかし、保護者アンケートから、１５パーセン	B

		トの家庭が配布物をあまり確認していないとの実態が見えている。学校からのメール発信には反応していただけるものの、保護者に各種便りを見せない児童もいることや紙媒体を目にしない保護者が増えていることが考えられる。学校ホームページがリニューアルされたことから、今後も、発信方法の工夫・改善の必要性を感じている。 ■８５％の保護者が「相談しやすい学校」と感じていただいている。これまでも、保護者からの相談に真摯に向き合い対応を行ってきたものの、１５％の保護者がそう感じておられないことも事実である。学校への相談は、子育てや友だち関係に関するものが大半を占めるが、保護者の不安を取り除き、信頼関係の構築にもつながることから、引き続き相談しやすい学校づくりを目指していきたい。また、SSW（スクールソーシャルワーカー）や SC（スクールカウンセラー）も配置されていることから、それら専門家と連携を図りながら、保護者の期待に応えていきたい。	
	□学校運営協議会の活性化	■本年度、学校運営協議会は、３回開催した。また、学校参観日を年２回設定し、委員の方々に児童の普段の姿をご覧いただくとともに意見交換を行った。運営協議会では、児童の交通安全、ボランティアの固定化・高齢化などが大きな論点となっている。本年は、運営協議会で長年の懸念事項であった浄化槽の下水道連結工事が完了し、これまでの取組の一つの成果となった。運営協議会で話し合われる内容や成果は、学校だよりでも紹介し、情報発信を行っている。	
	□共育コミュニティとの連携	■隅田中学校区共育コミュニティでは、これまで同様、地域の活性化を目指して様々な取組を行っている。すみっし―プロジェクトの啓発、園・各校や健全育成との連携を常に念頭に置き、話し合いを進めている。今年度本校では、特に園との交流の活性化に力を入れた。保育士による読み聞かせ会の実施、5 歳園児との交流会、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの共有など、園とのかかわりを強めている。 　また、「わいわい集会」では、石川千明さんを講師に招き、情報モラルについてのお話をいただき、それをもとに話し合いを行った。隅田の町全体のことを考えると、地域住民の参加を増やしていく必要があるが、中学校区の園・学校の職員が交流できる絶好の機会となった。	
	□地域人材との連携強化	■家庭科ミシン補助（５年生）、九九学習補助（２年生）、図書館ボランティア、低学年の放課後学習教室など、共育コーディネーターのご尽力や地域の方々のご協力により、多くの場面でお力添えをいただいた。また、校内に生け花をいけていただいたり、クラブ活動などでもご協力をいただいたりしている。しかし、新たな地域人材を確保することが近年の課題であり、保護者の参加も促すなど、保護者・地域全体で学校を支えていただけるよう、今後も、情報発信や啓蒙を行っていきたい。	
	□地域ふれあいルームの充実	■放課後ふれあいルームは、概ね計画どおり実施することができた。この活動は、共育コーディネーターと連携し、児童の放課後の活動を企画・運営するものである。楽しみにしている児童も多く、毎回多くの児童が申し込みを行っている。放課後の居場所作りでもあるため、来年度もできる限り、実施していきたいと考えている。	

４　保護者アンケート集計結果から見えてきた成果や課題

【成果】

〇学校全体に関する評価項目の多くが、８５％を上回っている。特に、「学校は、教育目標や学校の取組・課題等について、学校だよりやホームページ等を通じてわかりやすく伝えている」が最も高く８８％となっている。こまめな HP の更新や定期的に発行する学校便り・地域版学校だよりを見ていただいている方々の評価であると考えている。

【課題】

△「学校からの配布物をよく読んでいる」の項目が昨年度より５％上昇し、８８％となった。しかし、１０％以上の保護者が目を通されていないことが気になる。学校から配信するメールに反応してくれる保護者は多いものの、紙媒体にはあまり目を通さない保護者が増えているように感じる。子どもたちから届いていないことも懸念されるが、すべて電子媒体で配信することができないため、保護者にご確認いただけるよう依頼していく必要がある。

△「早寝・早起き・朝ご飯」の項目で、２０％以上の保護者がきちんとできていないと回答している。生活アンケートでも、朝ご飯を食べていない児童の割合が増加してきている。また、就寝時間も小学生に必要な時間を確保できていないこともあるようである。基本的な生活習慣の基盤であるこの項目については、学校をあげてさらに取り組む必要がある。

△学校行事やPTA行事への参加率も伸び悩んでいる。また、本保護者アンケートへの回答率も８０％と昨年同様であった。共働きのご家庭が増える中、学校教育に関心をもち、足を運んでいただけるようになるかが今後の課題である。

△家庭での読書については、６割近くの保護者が否定的な回答であった。昨年度の反省により、土・日用の図書を貸し出したり、各学級で「ぶっくん通帳」を活用した取組をしっかり進めたりしていることから、児童の読書数自体は減少していない。しかし、家庭で落ち着いて読書する習慣が身についていない可能性も否めないことから、現在も取り組んでいる保護者を巻き込んだ「家読」をさらに進めていく必要がある。

５　今年度の取組の成果と課題・改善方策

（１）研究体制は、年々主体性を増し、同じベクトルを向いて研究を進められている。今年は、７つの研究授業をはじめ、若手教員を中心として公開授業を実施した。その結果、指導案検討会や研究協議において、授業の見方や視点が、大きく変化している。また、４・５年生の県学習到達度調査では、算数科において県平均を大きく上回った。授業力だけでなく、児童の課題に向き合い改善策を常に模索していること、授業に向かう姿勢を大切にしていることが、この結果につながっていると考えている。

（２）読書数増加への取組は、今年度も継続した。児童会活動からの児童らへの啓蒙、各学級の「ぶっくん通帳」を活用した取組、図書ボランティアとの連携等により、読書数は倍増した昨年度と同等となっている。これらの取組は、文科省への優秀実践校として推薦されることにも繋がっている。

（３）本年度は、これまで以上に幼小連携の活性化を行った。アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの共有、保育士による低学年児童への読み聞かせ会、校内マラソン大会への応援参加、1年生との交流会など、積極的に園との交流を深めている。今後も、共育コミュニティとしての幼小連携、小中連携に継続して力を入れていきたい。

（４）共育コーディネーターはもちろん、学校ボランティアや多くの地域の方々にご協力をいただき、様々な体験活動や地域学習、放課後ふれあいルーム等を充実させることができた。また、低学年を対象とした「放課後学習教室」も継続できている。地域には、ご協力いただける様々な人材がおられるが、その方々の高齢化が進んでいることも事実である。新たな人材の発掘は急務であるため、ＰＴＡと協力してこの課題に取り組んでいきたいと考えている。